変化し流動化する世界と地方の役割

― グローバルとローカルの位相 ―

講師：哲学者　内　山　　節

2019 年 2 月 28 日㈭　18：00 ～ 20：00

高知共済会館 3 階　「桜」

公益社団法人　高知県自治研究センター

変化し流動化する世界と地方の役割
― グローバルとローカルの位相 ―

2019/2/28・高知

１．はじめに
― 先進国による富の独占が崩壊するなかで

２．富の独占が不可能になったとき
― 国民すべてを支えられなくなった国家と資本主義
― 国際的な格差が、国内の格差社会へと波及する
― いらだちと感情の時代
― 国家主義勢力の拡大、階級社会における「左派」の基盤

３．啓蒙主義の没落
― 近代のひとつの側面・・正しいことを学ぶ、伝えるという知の作法
― それは知を力とする支配関係を生んだ
― 知識人、インテリゲンチャ、マスコミ、リベラル・「左翼」思想などの時代
― グローバル化された世界は、お金という知的でも文化的でもないものが世界を支配する現実をつくりだした
― インターネット時代の変化・・自分の感情を発信できる時代
― 知の支配に対する疎外された「暴動」
― 感情で動く人々の大量発生、感情で動く政治
― 感情的に同意できるかどうかがすべて
・・国家主義者、トランプ支持者、ヘイトスピーチ、安倍支持者、韓国、中国

４．啓蒙主義の終焉、知の時代の終焉から何を学ぶか
― 普通の人々が主人公になれる社会をどうつくるのか
― 誰もが社会づくりに参画できるかたちを模索する
― その基盤としての関係が結べる社会

５．ローカリズムとは何か
― 関係の集積が生みだした時空としての地域
― 関係がつくりだすローカルな社会・・地域に限定されないローカル

― ローカル世界をつくりださないかぎり、主人公にはなれない人々が絶えず生み出されるという問題
― 近代社会はファシズムや国家主義の動きを絶えず成立させてきた

６．個人の時代から関係の時代へ

― 日本の伝統的民衆思想を読み直す
― 関係に本質をみた思想としての大乗仏教思想
― 仏教思想とともに展開した日本の共同体

７．まとめに代えて

― 近代的世界の限界といかに向き合うか

変化し流動化する世界と地方の役割
― グローバルとローカルの位相 ―

2019（平成31）年２月28日㈭　18時～20時
高知共済会館３階　「桜」
高知市本町５丁目３－20

哲学者　内　山　　節 氏

（司会）

皆さん、こんばんは。ただ今から高知県自治研究センター主催の内山節先生をお招きしてのセミナーを始めていきたいと思います。私は本日の進行をさせていただきます高知県自治研究センターの石川と申します。どうかよろしくお願いいたします。内山先生をお招きしてセミナーを行うのは今回で10回目になります。昨年は冊子でお手元にお配りをしてありますが、平成という時代の総括的な話を冒頭にしていただきました。今回は平成というような元号ではなくて、もう少し大きなスパンで見た時に現在がどうなのかということで、今日の主題は「変化し流動化する世界と地方の役割」ということでお願いをしてあります。もう少し大きなスパンで見た時に、例えば思想でどうなのか、経済的要因でどうなのか、あるいは科学技術としてどうなのか、さらには国と国、地域と地域、人と人との関係でどうなのかという大きなお話をしていただきたいということを、ご依頼を申し上げたところです。

そして「グローバルとローカルの位相」という副題を付けてあります。先ほど申し上げた大きな話をしていただいた上で地方に住む私達が現在様々な社会システムのいきづまりや限界がある中で、そういったものにどう向き合うのか、その時にグローバルとローカルが対立するのではなくて、どういう関連であるべきかなどについて今日、内山先生の方から私達にそういったことを考えるヒントをいただきたいと思っておりまして、こういった副題を付けたところであります。後ほど質疑の時間も若干取りたいと思いますので、最後までどうかよろしくお付き合いいただけたらと思います。それでは早速、内山先生よろしくお願いいたします。

（内山氏）

それでは、ご紹介いただきました内山です。もし、今の世界がこれからどうなっていくのかという質問を受けますと、分からないと答えるしかないです。つまり今日の米朝の首脳会議は上手くいかなかったらしいですけれども、これもまた２、３カ月したならば劇的な合意という可能性もあるし、その逆に２、３カ月の後にまた対決の時代という可能性もあるし、つまり何が起きるのかさっぱり分からないという、そういう状況です。その一番の理由は、やっぱりかつて先進国があって途上国があってみたいなそういう世界の在り方が変わってきた、そこに尽きるという感じです。実際、今までも話してきたんですけども、今から二、三十年前ぐらいまでならば世界の富は先進国が独占していました。それが一番顕著だったのが1970年ぐらいまでです。70年代の半ばになるといわゆるオイルショックがあって、産油国が力を付けるというそういうのが崩れ始めた最初という感じです。ただまあ、それからまた時間が経過する中で今、世界中でいろんな経済の動きが出てきました。

先進国による富の独占の終焉

そういう中で先進国が世界の富を独占しながら世界を支配するという、そういう構図が終わってきたと見てよいと思います。そういう中でいろんな現象が起きてきました。それはかつての途上国が発言力を付けてくるということでもあります。同時に今の先進国の在り方というのは、やっぱり世界の富を自分達が独占していくということを前提にして作られています。それができなくなってくるということになると、今迄の仕組み自体を維持するのが困難になってくると考えてもいいです。その中で企業の方からいえば、旧途上国で作られた物と、それから日本のような社会で作られた物というのが対等に市場で競争するというそういう時代に入ってきたわけで、しかもそういう中でかつての途上国と言われた国というのは、あっという間に生産力を付けてくるという時代でもあります。

これは例えば今、アメリカと中国の貿易で摩擦を起こしていると、日本にその余波がいっぱい回ってくる。どうしてそんなことが起きるかというのはアメリカ、中国で作っているいろんな製品の中に日本の部品が使われているとか、あるいは中国の工場の生産の仕組みで日本の産業用のロボットだとか大量に使われていく。だから中国の経済がちょっと落ち目になってくると日本からの部品供給も減ってくるし、それから新たな設備投資も減ってくる。そういうことが繰り返し、繰り返し起きてくるということでもあります。ですから、一部のヘイトスピーチなんかをやっているような韓国嫌いの人達だと、だったらもう韓国に部品供給するのを止めたらどうかなんていう意見が出てきて、実際もし日本がいろんな部品の供給を韓国にしませんというようなことをやってしまった場合、その場合には恐らくサムスンとかあっという間に経営危機になります。つまり韓国が作っているギャラクシーというスマホは、日本の部品無しで作ることは、ほとんど不可能という状況でもあります。それが世界中そんなことをやりあっているわけで、それは韓国の問題だけじゃなくて、日本も日本製と言いながらいろんな国から部品を入れているというのが現実なんです。ですから、そうやって諸外国から良い部品を買いながら生産をするようになれば、そこの国の生産物というのがあっという間に高品質になってくるというのがしばしば起きてきます。

さらには人間も今、同じように売り買いができる時代でもあって、実際韓国が急速に高品質な物を作れるようになっている過程では、日本でリストラされた技術者とか、あるいは定年になった技術者が、たくさん韓国に雇われていたという時代もありました。今、同じことが中国で起きていて、中国には日本でリストラされたり、定年になった技術者達がゾロゾロいるというそういう感じです。そうすると技術者も買ってこれるし、部品も買ってこれるという、そういう時代ですから、ちょっと前までは安かろう、悪かろうと思っていた物が今では遥かに良い物を作っているというようなことがあっという間に起きてしまっています。実際に今、中国では日本人技術者達を大体年俸３千万

くらいで雇っています。ただし契約期間は大体３年です。３年経ったらお払い箱というそんな感じです。だから３年間にその人達の持っている技術を全部自分達のものにしてそれでお払い箱。ただリストラにあった技術者からすれば、３年間で９千万払ってくれるわけですから、「これはひとつ行ってみるか」という人達が出てくるのは当たり前のことです。

今そういう時代ですから、かつてのような先進国、途上国という区分けがなかなか難しくなってきました。同じようなことがいろんな形で起きているから、例えば今後、車が電気自動車化していきます。僕は一部の車が電気自動車化するくらいで、やっぱり全体の電気自動車化は無理だろうというふうに今のところは思っています。ただ、そういう方向が強まっていくことになれば同じことでいろんな国が生産してくる。つまり、バッテリーを作るための必要な部品、これがまた世界中で回って、そしてまたそれを元にしてバッテリーを作っていた技術者達がまた世界中で引き合いがあったりする。それであっという間にいろんな国で性能の良い物ができるような時代になっていくということです。そういうことですから、かつてのような本当に「我々が中心だ」みたいな感じで動いていく時代がもう無理になってきています。

例えば、先進国の人達は金がある、だけど途上国とかそういう国に行けばお金が無いという、世界的な意味で起きていた格差がそれぞれの国に持ち込まれてしまった。もちろんそのことだけではないですけど、それも理由の一つであることは確かです。だから今、先進国はどこの国に行っても激しく格差社会の時代になってきていて、例えばアメリカは雇用統計で見ていくと経済状態はいいという話になるんですけど、実際にはアメリカでも新規求人を出している雇用というのは日本的に言うと非正規雇用ばかりです。ですから、働き口はあるんだけれども収入が多くなってくるような働き口は極めて少ないという、そういうのが今のアメリカでもあるし、それは日本の状況でもあるような気がしています。

結局これは何を意味するかというと、国が全ての人達を支えているとか、企業がその企業で働く

人達全てを支えているとか、そういうことがだんだんできなくなってきた。ですから国の方も切り捨ての時代に入ってきて、一部の人達にしわ寄せがいくし、それが一部で済まなくなってきて今や働いている人の40％が非正規雇用というようなそういう時代になってしまった。今までも十分に支えたかどうかは別ですけど、この後いろんな形で増税から社会保障のレベルの切り下げから、多分いろんなことを行いながら結局もはや国はみんなを支えませんよという、そういう時代に移行して行くというのが今の世界の趨勢（すうせい）になってしまっています。そういう中で人々からすると、苛立ちの時代とでも言っていいようなことが発生するわけで、そういう苛立ちの中から一部の国では国家主義的な勢力が力を付けてくるし、またそれは一部では昔の左翼勢力みたいなものが生き残る基盤をまた作るという、そういうことでもあります。だけどその先に何が発生しているのかということについては、本当に読めなくなっているというのが今の状況と言ってもよいという感じです。

権力集中の支障

実際にそういう中で政治の方も国民を洗脳して自分達の味方に付けるといいますか、そういう洗脳型の政治がどこの国でもまた起きてきます。実際例えば、今の安倍政権を支えているのは韓国と北朝鮮と中国で、若干ロシアも支えているのでは

ないかという気がしています。

つまり、そこで敵というものを設定して、その敵に対して自分しかないというような感じでそれであおっていく、そんなことが行われています。実際僕なんかもいろんな人の話を聞いていて、それで安倍総理を支持するかなりの人達が「今のような状況ではあの人しかいない」という言い方をします。つまり、安倍さんがやっている具体的な政治が良いとか悪いとかいう話ではなくて、「今の中国に対抗できるのはあの人しかいない」とか、それから毅然として「北朝鮮とか韓国と向き合えるのは、あの人しかいない」、だから支持すると言っている人が結構多いんです。これはそういう方向で、安倍さんという人は洗脳してきた。そのことで政治基盤を作ってきたというふうに言ってもいいわけですし、同じようなことが内容は違うにしてもトランプにも言えるわけで、結局自分が大統領になって偉大なるアメリカを再建するという話だし、その前の偉大なるアメリカとはいったい何なのかということ自体はさっぱり分からないんだけれども、ともかく今アメリカは落ち目になったと、それを再建できるのは私だ、みたいなそういう洗脳でもあるし、だから世界中でそういう洗脳型の政治が力を付けていくというそういう時代に入っていることも確かです。

レジュメにはないんですけど、1789年にフランス革命というのがありました。フランス革命はいわゆる自由・平等・友愛という近代の理念になったと言ってもいいようなスローガンを出してそれで王政を打倒したという、だから歴史上から言うと輝ける革命であったというふうに教科書に大体書いてあります。ただ最近、そうなんだろうかという意見はいろんな角度から出てきていることは確かです。むしろフランス革命以降の世界がいろんな問題を起こしているんではないかというふうな見方もあります。10年ぐらい前に亡くなったフランスの有名な文化人類学者のレヴィストロースは日本にも何遍も来ていますし、日本でも翻訳書だけでも多分20冊ぐらいあると思いますけど、そういうフランスのその分野の第一人者がいました。その人が著作の中ではっきりと書いているのは、「フランス革命は偉大なる革命と言われたけれども100年後、200年後の教科書はフランス革命が失敗の始まりだったというふうに書くだろう」と、そういうふうなことを前に言ったりもしています。つまり、今のような社会の入口を作ってしまったという、そういう点ではこの辺も見直す必要性が出てきたというのが今の時代という、そういうことでもあります。

ただ僕はレヴィストロースの意見にはある意味

では賛同するんだけど、こういう問題がもう一つあるような気がします。それはフランス革命が起きた時というのは、フランスではルイ王朝、ルイ14世から16世の頃ですけど、そういった時代のフランスだったわけです。この頃というのはいわゆる絶対王政期のフランスと言ってもいいんですけども、国家権力が歴史上もっとも強くなった時代です。つまり、その前は日本で言えば幕藩体制みたいなもので、いろんな地方の領主達、その人達が国の王様の下に集まってはいるんだけれども、地方に行けば領主権力、つまり藩の権力みたいなものですけど、そういう社会でした。それが絶対王政期になってくると、領主はいるんだけれども王様の力が圧倒的に強くなって、それである意味では中央集権型の国家が作られた。その中央集権型の国家に対して革命が起きて、それで王様とか貴族達がギロチンで処分されたというか、そんなことになったわけです。ところが、あの時に中央権力はこれだけ強い力を持っていてよかったのかどうかという、そのことの検討は全くなされてないんです。むしろその強大な中央権力をそのまま共和制に移行させた。だから中央が大きな力を持って今迄は王様達とか貴族達が勝手なことをやってたんだけど、それをむしろ人民のために使うという、それをすれば良い社会ができるんだという、むしろそんな感じでした。ですからフランス革命の後、最初に起きていくのはジャコバン独裁というそういうことが起きましたし、それからその後ではナポレオン帝政ができて、ナポレオン帝政というのは、国民投票によって皇帝が選ばれたという歴史上稀有なできごとなんです。そういうことが起きます。つまり、強大な中央権力を誰に委ねていくのかという、そういうことになっていったということです。

やっぱりあの時に本当は検討しなければいけなかったのは、中央権力というのはどの程度の力が一番いいのかという、逆に言えば地方はどのくらいの力を持ったらいいのかという、つまり、中央と地方との力のバランスをどういうふうにするのか。結局中央が強大な権力を持ってしまえば、その権力を握ってしまえば何でもできるという体制になってしまうわけです。だから、仮に選挙制度があったとしても上手く選挙民を洗脳して、それで選挙に勝ってしまえばやりたい放題ということが起きます。これは実際に日本だけの問題じゃなくて世界中で起きているわけです。だから結局は民主主義というのは最良の方法ではないという言われ方をよくしていて、ただ他に方法が無いから他よりはいいだろうという、その程度の評価です。そういう時代でもあります。結局その原因というのは国家権力が強すぎて、握ってしまえば俺の物という、そういう感じになってしまっています。今年も参議院選挙がありますけれど、選挙の時には皆さんご存じの通りのような選挙が行われて、その後には好き勝手な政治が行われるという、それの繰り返しです。

やはりあのフランス革命の時に、中央権力はどのぐらいの力を持つべきなのかという、その辺の検討が絶対必要だったんです。しかし、それを全くやらなかったんです。先ほど言ったように強大な権力を人民のために使えばいい社会になるという、むしろそっちの方の発想だったんです。だからそれの一つの形が別の方向で生まれてきたのが、かつての社会主義政権だというふうに言ってもよくて、社会主義政権だって、例えばソ連を見れば最後はあんなふうに崩壊しましたけど、決して革命をやった人達が悪意を持って革命をやったわけではないです。じゃあ、その人達からすれば強大な中央の力を作ってその力を持って社会を改革して、それで人々を幸せにしていく。そうすれば良い社会ができるというふうに思ったということです。ところが強大な中央権力を作ってしまえばそこで権力は腐敗を始めるし、またそこでは絶えざる権力闘争のいろんな問題が起きてきます。結果としてはソ連の崩壊につながるという、そういうことでもあります。だからそれは今の中国でもあるわけですけれども、確かに共産党が圧倒的な権力を持っていると、しかし、その結果としてはやっぱり腐敗であったり、官僚主義であったり、あるいは見えないところでの党内闘争であったり、そういうことが絶えず起きてくるということであって、だから、いずれこの体制はまた崩壊するんだろうという気がいたします。つまりこの場合、思想が間違っていたとかいう話の前に強大な権力

が存在すること自体が問題点なんです。やっぱりそのことを頭に入れておかないといけないという感じです。

全権力を持つべき所

ですから僕自身は、こういう問題については、一番小さな自治組織が全権力を持つべきだったと思っています。だから、今ちょっと日本の市町村ということになると、残念ながら平成の合併なんかを経て不当に大きすぎる市町村がたくさんありますのでその辺はまた後で考えなければいけない問題ですけども。

例えば、今のフランスだと、市町村の数が３万５千いくつぐらいあるんです。人口で言うと確か７千万弱ぐらいですから、日本の半分ぐらいの所に３万５千いくつの市町村があるということです。それで言うと日本だと７万ぐらい市町村があるという、それぐらいたくさんの市町村があります。僕は魚釣りが好きなのでフランスに行っても、地方の村々に滞在をして釣りをしたりします。人口が100人とか200人ぐらいの村がいっぱいあって、中には数10人という村もありますし、そういうとこは全部自治組織なんです。つまりこの規模、もうちょっと大きくて千人ぐらいいてもいいんですけど、そういう規模になってくると住民同士が寄り添うような感じで関係性が作れます。つまり、全員がお互い知っているというような、むしろそういう感じ。だから何があっても寄り添う関係みたいのができていくということです。だから人間達が幸せに生きようとすると、やっぱりこう寄り添えるような関係が一番力を持っているという、それが一番大事なんです。

僕は生まれは東京ですけども家が２軒あって、１軒は東京にあるんですけども、もう１軒は群馬県の上野村という山村にあります。これも釣りに行って気にいったから住んでいるというそういう村です。上野村は今、人口が1,200人ぐらいです。上野村というのは明治になって上野村ができてから一度も合併したことがないので、1,200人が多いとは言わないけども、ピンチだなという感じでもないです。つまり上野村ができた時、大体1,000人ぐらいだったんです。ですから1,000人ぐらいでもいいやという、ただ持続性があればいいやと、僕らそんなふうに考えているんです。やっぱり人口1,200人ぐらいの村というのは行政も含めて寄り添えるような関係ができるということであって、だからいつも思うんですけど上野村には高齢者問題が無いというのをいつも感じるんです。実際には山奥の村ですから、40％ぐらいは高齢者ですし、その点では高齢者いっぱいいるんです。ただもちろん、山の中で暮らしている、例えば70歳なんてもの凄い元気ですから、この人達を高齢者と言うべきなのかどうかという問題はあります。ただ年齢で切ればたくさん高齢者はいます。だけど高齢者問題はありません。どうしてかと言うと、高齢者問題というのは、高齢者を数で言うから発生する問題なんです。例えば東京だと、東京の高齢者がどのくらいいるのか分かりませんけど、人口１千万を越えてますから、10％いても百万人の高齢者がいるわけです。今20％ぐらいいるはずなので、そうすると200万人とか300万人の高齢者がいます。その内の例えば、３分の１の人達が何らかの介護を必要としていて、しかし、その人達が仮に何らかの施設に入ろうとしても施設がこれぐらい足りないとか、あるいはヘルパーさんが何万人足りないとかです。

つまり、ここで言われているのは全部数なんです。東京の規模になったら数で言うしかない。だからヘルパーさんを何万人作ろうとか、あるいは入所できるような施設を何万人分用意しようとか、絶えずそういう話になります。それに対してうちの上野村になってくると、そういう数で人を扱うという必要性が全くないんです。例えば太郎さんが足の骨を折ってしばらく動きが悪いと、しかもその後もちょっとあんまり芳しくなくて、寝たきりではないにしてもお風呂なんか入るのが大変になったとかです。そうしたらその太郎さんをどう応援したらいいかというのを考えればいいんです。うちの村は、もともとは認知症が無い村というので有名だったんですけど、最近発生しているんです。大きな病気になって都市部で大きな手術をして、それで帰ってくるとすっかり認知症っていう、

なんか医療の結果としての認知症という人達が最近ちょっとボツボツ出てきています。だけど仮にその花子さんがそういうことになって、ちょっと帰ってきたら認知症ぎみだと。だったら花子さんのためにはどうしたらいいかということです。だからうちの村で発生するのは太郎さん問題とか花子さん問題なんです。それは年齢関係ないわけで、若い人が仮に山で仕事をしている時に腰の骨を折ってしまったとかそういうことが起きたとしても、同じ問題になるんです。つまり高齢者問題ではなくて太郎さんの問題や次郎さんの問題や花子さんの問題というのが起きるだけなんです。

結局これは寄り添えるぐらいの規模の自治体・村であるからそれが可能になっていくわけで、東京の規模になってしまうと、そんなものできるはずがありませんということに当然なってきます。

だから、そんなふうに人間同士が寄り添いあって助け合ったりできるような、そういう規模こそが全権を持つに相応しい。だから本当だったらそういうところが全権力を持つということを宣言すべきだったんです。ただし、例えばうちの村で勝手にあらゆる法律を作るとか、あるいは防衛から外交まで全部うちの村でやるということになると、それは当然ながら無理が発生します。だいいち交通法規なんかをうちの村で勝手に作ったら、村の境を出た瞬間に違う道交法なんてことになると、かえって危険という問題も起きるわけです。だから市町村単位で作ったのでは不都合と思われるようなもっと大きい単位で作らないとまずいという法律とか、あるいは外交・防衛みたいなちょっと一つずつやるわけにはいかないというものについては、市町村が県に委託するという、そういう制度にすべきだったんです。しかし、県もちょっとうちで勝手に作るわけにはいかないというような規模のものがありますから、そうしたらそれを国に委託します。結果的にはかなりのものが国に委託されることにはなってくるだろうと思うんです。

しかしその前には自分達が決めることを代行してもらうという委託ですから、委託した以上はそれを監視するという、それで仮に県は国に委託して、もし意に沿わないような決定を下していくということなら、当然ながら意義を申し立てる権利も持つし、場合によったらその決定に従わない権利も持つという、つまり委託したのに委託先がおかしな決定をしたなら従いませんという、それも有りだということです。だから小さい所が全権を持ってそれで自分達ではこなせないものを上に委託していく。だから国は委託機関になるべきであるというわけです。

国が全権を持ってはまずいということです。そうすると、例えば沖縄県なんかは外交・防衛の一部を委託しないと言いだす可能性はあるわけです。それはそれでいいわけで、それこそが地方自治です。だから沖縄だったらこういうことは国に委託するけれど、基地を作ったりなんかする話は沖縄は勝手に決めさせていただきますという、そういうことを言うかもしれない。それでいいわけです。そこのところが国が全権を持っている。沖縄に対しても実にこの間も県民投票やる前からどういう結果が出てもそんなの参考にしないみたいなことを平気で言っている国です。地方自治をなんだと思っているのかという感じがしますけど、今の権限で言うとその通りなんです。

だから、やっぱりこの辺の失敗というのはフランス革命の時からあったと言ってもよくて、やっぱり強大な権力というのは存在すること自体が悪だというふうに言ってもよくて、むしろ小さい所が全権を持ってそれで委託をしていくという、そういう制度をあの時に考えるべきだったんですが、残念ながらそういう話にいかなかった。そうすると先ほどから言ったように権力を握るためにあらゆる洗脳を行って、それで日本を立て直すのは安倍しかないみたいな、よく分からない洗脳が行われています。しかし実際にそれで選挙に勝っているという、本当に不思議でならないんです。

知の力の変化

マスコミ界もそうだけど、なんか口を開くと必ず民主党政権時代は酷かったからという言い方、あのニュースなんか聞いていても解説では必ず出てきます。僕は別に民主党の支持者でもなんでもないんですけども、今の安倍政権より民主党時代

ってそんなに酷かったんですかという気がしますし、今よりはもうちょっとましだったんじゃないですかっていう気がします。だから、民主党も失敗もあったとは思いますけれども、しかし必ず出てくる民主党時代が余りにも酷かったっていう、あれは何でしょうか。ただ、そういうことも含めて洗脳です。そういう洗脳によって、取ってしまえば俺のものという世界中そういう政治が広がっているというふうに言ってもよいということです。

ただ、そういう中で今一つ顕著な問題が発生し始めてます。それはレジュメの３のとこには啓蒙主義の没落と書いているんですけど、実は近代的な世界、近代という時代というのは、一面では啓蒙主義の時代だったというふうに言ってもいいと思います。つまり、正しいことを知っている人達が、まだ無知な人達に教えてそれで引っ張っていく。それは例えば、社会主義運動なんかでもそうだったわけで、社会主義運動にとってみれば社会主義の理論というのは正しい理論だと。そうすると、それを知らない人達は無知な人達という感じで、だからその人達に教えて啓蒙して仲間を増やしていく。そういうことが盛んに言われた。それは社会主義だけの問題じゃなくて自由とか民主主義とか全てそうであって、つまり、自分達が知っている正しいことを正しく学んで正しく伝える。そのことによって社会を良くしていくんだという、そういう時代です。その正しいことの内容はいわゆるリベラル的なものから社会主義的なものまでいろいろあったけど、ただやり方は同じだったと。つまり、正しいものを私達は学んで伝えてそれに基づいて行動をしているという、そういうことがよりよい社会を作っていくのには、絶対必要だというふうに言われています。その正しいことの担い手達として、例えば知識人という言葉が使われたり、インテリゲンチャという言葉が使われたり、そしてまたそこにマスコミが入っていたり、リベラルだったり、それから社会主義なんか含む左翼思想だったり、ともかくそういうふうなところで、それが担われていきます。

ところがそれが、ハッと気がついてみると、いわゆる知識とか知の力を軸にした格差社会を作っていたんです。つまり、知の力で語ることができる人達というのが、いろんな意味で社会の上位に立った。今度それができない人達というのが実は発言を封じられていたということなんです。実際、例えば僕の場合、文書を書いたり、本にしたりとか、それが主要な仕事なんですけど、そうすると今迄は、発表をしようとすると、出版社から本を出すとか、あるいはやっぱり出版社から雑誌に掲載するとか、あるいは新聞に原稿を載せるとか、そういう話だったわけです。そうすると結局それはある人達に限定されます。つまり、そこでいったい誰のものを出して誰に原稿を書かせるのかという話になると、いわばそこに知の構造みたいなのがあって、そこのところで何となく決まっていくという、そういう仕組みだったわけです。ところがそれは、その構造からはじき出されている人達からすれば、実は発言の場もないし何にもない。つまり、ついこの間までというのは、知の作法をちゃんとできないなら黙って話を聞いてよっていう、むしろそういう社会を作ってしまっていたということなんです。それはだから社会変革運動なんかでもそうですけども、その理論がどういう理論であれ、やっぱりそこで知の力を使って、それで思想を語ったり、理論を語ったり、これからを語ったり、そういうことをできる人達が軸になって、そしてその力を持たない人達がいれば、その人達はいわばできる人達の下で従属しながら生きるということを実は強いられていたんです。この問題に良い悪いの問題は別問題として悪い意味では風穴を開けることになったのが、インターネット時代だったわけです。

インターネット時代

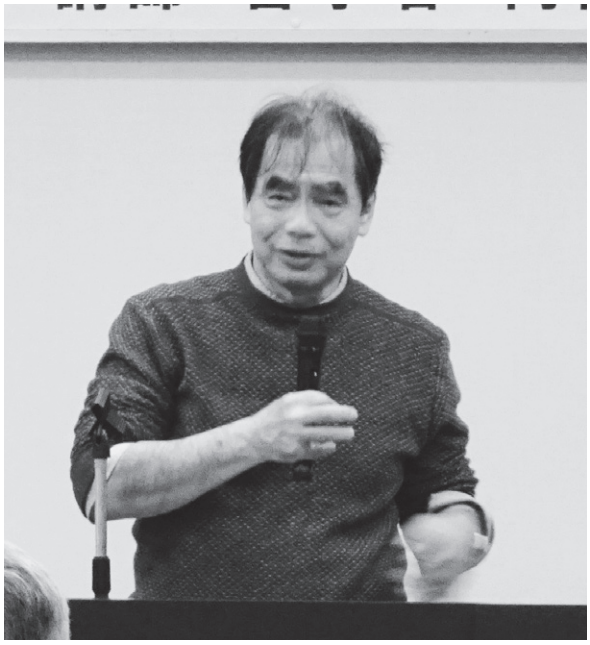
例えば、かつては自分の意見を発表する方法から排除されていた人達が、今インターネットの時代になって、いくらでも発信できるようになりました。実際今、雑誌なんていうのはどんどん減少しています。週刊誌もまだいくらか出てるけど、昔あったような月刊誌的なものである程度の論陣を張っているみたいな雑誌は、もう本当に無くなりました。それに対してそれに代わる役割を果た

してはいないんだけど、代わるような感じで出てきているのは、インターネット上に掲載されるいわゆるネットマガジン系のものであったり、さらにはインターネット上の雑誌、つまりウェブマガジン系とはまたさらに別に自分で勝手に発信していくってことは、やろうと思えばいくらでもできるようになってきました。そのことで実は今迄圧迫されていた人達が、自分の意見をどんどん出すという時代に移ってきたんです。ところがそれが良いことなのかどうなのかという話になると、また分からない問題が起きているわけです。つまり誰でも発信できるというのは、今度はきちっとした検証をしないで自分の感情任せに発言して、それがウェブ上にあふれてしまったということです。

だから、例えばヘイトスピーチなんかもそうですけど、昔だったらヘイトスピーチをする人達というのは自分達の機関紙ぐらいで発言することはできても、世間一般に発信をすることは、まず不可能でした。つまり、この話だったならば新聞も載せてはくれないし、雑誌も載せてはくれないし、出版もさせてくれない。自分達で出版社を作って出すってことは、やろうと思えばできたかもしれないけど、非常にハードルが高かった。ところが今だとヘイトスピーチをそのまま発信してしまうということは、かなりできるようになっています。またヘイトスピーチをしている人達のことを、この間、我々は誤解していたというのが随分わかってきました。つまり以前は、ああいうことをしている人達というのは若い人達で、そして社会的にはむしろ非正規雇用の人達が多く、どちらかというと貧困層の人達がヘイトスピーチの担い手であるという、そういう定説があったんです。そうしたら最近、弁護士の解任問題というか、何かがあったりして、それで署名運動があったりしたもんだから、そのヘイトスピーチ側にです。そのためにどういう人達がやっているのか分かってきて、そうしたら軸になっているのが、40代もいるんですけど、むしろ50代とか60代とかでした。

だから若い人達は付和雷同型ヘイトスピーチグループであって、中で軸を作っているのはむしろ中高年だというのが分かってきました。しかもその人達はけっして貧困階層というわけでもなくて、人によっていろいろあるんだけど、結構、生活実態としては悪くないといいますか、むしろ少し良いぐらいです。そういう人達も結構いるというのが最近分かってきました。ただ言えることは、その人達が知の作法を持ち合わせていなかった。だから今迄の社会の中では、つまり知的世界から除外されている人達、つまり発言を封じられている人達が存在していて、その人達が「韓国はけしからん」とか「在日はけしからん」とか、即自的なものをそのまま発信することが可能になっています。そこで一気に自分達は開放感を得たっていう、そういうことがどうも発生したんだというのが分かってきました。ですから、そういうところなんかにも現われてくるのは、実は感情の時代ができあがってしまったという、つまり今迄はある意味では知の時代、だから知の力みたいなものを表現することによって発言力を得るという、そういう時代だったのに対してその感情がそのまま表に出せる時代。そちら側に移ってくるという、そういう現象が起きているということなんです。

僕自身は余り影響ないですけど、実際今のインターネット時代というのは、ちゃんとした書き手を育てにくくなってきことは確かなんです。つまり、内容的に右とか左とか別問題として、どういう考え方であれちゃんとした考え方を出すといいますか、そういう書き手を出しにくくなっていま



す。というのはウェブマガジン系のものってたくさんあるんですけど、共通して言えることは原稿料がむちゃくちゃ安い。今迄の紙に印刷した雑誌系の10分の１ぐらいの原稿料っていうのがはびこっているっていうのが現実なんです。そうすると原稿１本にしても時間をかけて書くことができなくなってしまっていて、どんどん引き受ける人達というのが、もう検証なしに粗製乱造でいくというふうにしないと生活ができないという、それでも生活ができないぐらい安いんです。ですから、そういうふうな状況なので昔から原稿書いている人達には、いくらなんでも昔の相場の10分の１とか、20分の１とかの原稿料でちょっと頼みづらいということになってくるんです。そこで書いてもらっている人達というのは、恐ろしい原稿料でやっているという感じです。結局じゃあなんでそんなに原稿料が安いのかと言うと、ウェブマガジン系が雑誌代金取れないからなんです。つまりほとんど無料なわけです。雑誌代金を取っているやつだと残念ながらほとんど購読者が付いてないという、だから収入になってないということなんです。

つまり、インターネット上のものというのは、タダだから見ているんです。お金を払ってまで見ようと思っている人が非常に少ないということなんです。ですから、そういうウェブマガジンなんか出しているところは、みんな収支が悪い。雑誌の購読料にあたるようなものが取れないもんだから原稿料が払えない。横にバナー広告みたいに出して、広告料で収支を合わせようとみんなやるんですけど、そんなに高い広告料を取ることができない。しかも雨後のタケノコのごとくできていきますから、一つの所に大量の読者が付くわけではないので結局経営的に苦しい、経営的に苦しいもんだからとてつもない安い原稿料になってきて、そこで検証されないような原稿がいっぱい出てくるということになって、依頼をしてるような一応プロの書き手と言われている人達もネット系のマガジンに手を出してくると、結局実に基盤がはっきりしてないようなものを平気でやらざるを得なくなっていくというのが今の状況なんです。

その一方において、さっきも言っているように全くこれ事実に反するのではないかと思われるようなものでも、感情任せに発表できるわけです。やろうと思えば誰でも発信できるという、そういう時代を作っています。だからそのことを見て感じるのは、凄く今迄も昔もつまり知的な力みたいなものを持っている人達が一定の発言力を持っていた時代というのは、そのことから疎外された人達、その人達の鬱積された気持ちというのを実は作っていたんだという、今度それが自分でもできるようになったと。その時に全員ではないでしょうけど一部の人達が、そういう感情任せのしょうのないものをどんどん発表するという、そういう方向にいく。ここで、だからどう考えるかということなんですけども、きちんとした検討をしない、ただ即自的な感情だけで発言するということが社会で公認されていくような時代というのが好ましいとは思わないんです。

しかしその半面においてじゃあ、かつての啓蒙主義的な知的な力を持っている人達が知の支配階級みたいな感じで登場してきます。それがよかったのかということはまた別の検討が必要です。つまり、どっちの方にも実は壁にぶつかっていて上手い解決策が見つからなくなっているという、だからつまりここでも一つの大きな混沌が発生しているということなんです。だから今、感情で動く時代みたいなのが発生していて、それがアメリカ

のトランプ大統領を大統領にした理由でもあったわけで、つまりアメリカのある程度の数の人達というのが、まさに感情で動いたということです。反ヒラリーで動くというのは、まさにヒラリーこそが古い時代の知の権力を代表する人のように思われたということなわけです。しかもそれがアメリカだったらまだいいんだけど、ヨーロッパにいってしまうと階級社会として固定化された知の権力というのがまた発生するってことなんです。

フランスの階級社会

僕は日本との比較地にフランスを使ってきたので、フランスだけは二、三十回ぐらい行きました。本当に暇だったならば今ちょっと行きたくなっていて、というのは金曜日のデモ、イエローベストの人達というのが本当のところどんな感じで展開しているのか、ちょっと見に行ってみたいなあという感じがしてるんですけど、残念ながら今ちょっと行く時間がないんです。フランスへ僕が初めて行ったのは、もう40年ぐらい前なんですけど、やっぱり一番びっくりしたのは日本とは違う階級社会がまだ相当力を持っているという、そのことにびっくりしました。実は今はもう無いんですけど、昔はパリに地下鉄がいっぱいあったんです。地下鉄には１等車両と２等車両というのがあるんです。普通僕らが乗るのは２等車両なんですけど、例えば５両編成だったら１両ぐらいドアの上に「１」と書いてあったりします。そういう１等車両というのがあって、別に１等車両だからといって特別な設備があるわけでもなくて、ちょっと綺麗かなという感じはしますけど、その程度で大差ないです。フランスの地下鉄は昔から改札口が自動化されていて、そこで僕ら行くと必ず回数券を買います。10枚つづりぐらいの感じで回数券が安くあるんです。それで地下鉄は何処まで乗っても切符１枚っていう感じで、その券はバスにも使えてバスはここまでが１枚とか、この先は２枚とかです。停留所によく見ると書いてあります。

地下鉄に乗る時に、もし１等車両に乗りたいと思ったならばその券を２枚改札口で使うんです。自動ですから誰も見ているわけではないんですけど、２枚切っといて、それで勝手に１等車両に乗ります。別に１等車両に乗ったからといって誰かが立っているわけでもないし、ただ、向こうの人に聞いてみると時々、私服の切符を調べる人が回ってきて、その時に切符１枚しか持ってないということになると、罰金になります。「フランスの罰金って大体10倍なのでうかつにやらない方がいいですよ」というこんな話でした。それで罰金を払ってないと、「連絡が空港の方にいってるみたいで出国できなくなってしまうのでやめた方がいいですよ」なんて向こうの人は言ってました。ただ別に入口で誰かが調べているわけではないし、よっぽど運が悪くなければ引っかかることもないので、僕も１等ってどうなっているのか何となく気になったのである時に切符１枚で乗ってみたんです。そうしましたら、多分この車両に乗っている人は子供の時から１等にしか乗ったことがない人だというのがよく分かるんです。つまり雰囲気が全然違うわけです。だから電車の中のできがいいとか、椅子がいいとか、そんなことは全く関係なくてその辺全部同じなんです。ただ、落書きが少ないとかいう意味でちょっと綺麗かなというぐらいの違いです。ただ乗っている人達の雰囲気が全然違っていて、つまり、こういう人達が乗るんだと。そうすると僕はやっぱりこの車両に乗るべきではない人間だというのがよく分かって、それで次の駅で「失礼しました」って降りて、また２等に移ったということがありました。さすがに地下鉄の１等、２等は無くなりましたけど、それぐらいはっきりした階級社会を形成していました。

フランスの航空会社の飛行機に乗りますと、やっぱりビジネスクラスに乗っているお客さんは、この人は多分生まれた時からビジネスクラス以外乗ったことがないだろうという、そういう雰囲気の人もいるし、やっぱり日本とは随分違うような、そういう社会を作っています。

実際そういう中で例えば今、日産のゴーン前会長が少々立場が悪くなったということなんですけど、ゴーンさんはフランスのエリート社会にとってみればいつでも切り捨てていい人なんです。つまり、あの人はレバノン人でもあるし、しかも、

貧乏な家の出身なんです。たいへん努力をしてそれでフランスにある高等理工学校という学校を卒業したんです。実はフランスには通常の大学とは別の特別エリート大学みたいなのがあって、そのうちの理工系の人がいくのが高等理工学校、それから政界とか経済界の人達がいくのが高等行政学院、あとサルトルなんかが出た高等師範学校という大学教授なんかを作る大学があります。最近、高等師範学校がちょっと没落しているんで、高等行政学院の全盛時代で、理科系だと理工学校があるという感じです。ゴーンさんはその高等理工学校にいって、それからタイヤメーカーのミシュランにいっているということなんですけど、あの出身ではいくら高等理工学校を出ていても、恐らくエリートとしては遇されることはないです。

実際ゴーンさんはミシュランで、例えばミシュラン何とか工場っていうのがあってそこがもうしょっちゅう労働争議で、それで採算は合ってない、それでつぶすにつぶせないという、そういうような所があった場合に自分から手を挙げて「私をあそこの工場長にしてください」みたいな感じで行って、そこで組合つぶしに成功したり、いろんなケースがあるんですけど、ともかくそこを立て直すことに成功しました。次々にそういう問題箇所を回って実績を挙げています。それでミシュランで偉くなっていって、それでルノーに移って、ルノーでも同じことをやって、つまりルノーが引っ張った理由というのは、当時ルノーのいろんな工場でやっぱり同じようないろんな労働争議とかいろいろあって、それで経営側からすると手を焼いているような工場がいっぱいありました。それをこう回ってゴーンがつぶして歩く。そのことによって出世をしてくるという、そういうことではあるんです。それで今の日産とルノー連合を作りあげて、しかも日産の金でルノーが生活をしてるみたいな感じになってますから、その功績みたいなのがあってルノーも会長にせざるを得なくなったと。だけどいずれ切り捨てられる人です。つまり現状の仕組みの中ではエリート的なんだけど、エリートの社会がエリートと認めている人ではない。つまりゴーンからすればいずれ切られてしまうことが分かっているので、少々汚くてもそれまでに金をいくら稼いでおくかとか、多分そういう方向です。ベルサイユの結婚式なんかやるもんだから、またエリート達は陰でみんな笑ってるに決まってます。だけど、どっちにしてもいくらすり寄ってもエリートの仲間にはしてくれないっていう、そういう社会だと思えばいいです。

実際ゴーンさんが会長になる前のルノーの会長というのは超長期にわたってシュヴァイツァーさんがやっていました。シュヴァイツァーさんというのはあの有名なシュヴァイツァー博士の家ですけども、あそこはもう名門の貴族ですから、それはもとから城をいくつも持ってるような大エリートです。それがずっとルノーの会長に君臨していて、その人は絶対に手は汚さない。つまり、いってゴチャゴチャになるような仕事はしません。結局そこのとこでエリート達はそういう場合によったら汚れ役になりかねないような仕事はしないから、そこでゴーンさんが「私やります」と言って手を上げては実績を積んだという、そういう経緯なんです。だからとりあえずは日本ごときにいきなり逮捕されるというのは、面白くないという気持ちも働くでしょう。特に今の長期勾留のやり方というのは国際的に見れば極めて異常なやり方でもあるんです。一応、抗議はしてみたけどゴーンを守る気はないという、多分そういうことだろうという気はします。だから、いろんな意味で階級社会ができあがっていて、今さっき言ったように高等行政学院というのが、そこの出身者が政界と経済界を牛耳っているんです。だから率直に言うと今のマクロンという大統領も高等行政学院ですけど、仮に今度保守系の政権がひっくり返って、もう一度社会党系の政権ができたとしても高等行政学院になるというのは変わらないわけで、昔のミッテラン大統領は違ったんですけど、その後はもうみんな高等行政学院。それで今ちょっとどうなっているかはっきり分からないけど、何年か前までは共産党の議長も高等行政学院という、つまり、どこが政権取っても高等行政学院のたらい回しなんです。ですから経済界も同じことになっていて、完璧なエリート支配だけど、それが階級支配でもあります。というのは、高等行政学院という大学は分かりやすく言うと、日本で言うと東京

大学の法学部だけが独立大学になったみたいなそういう感じの大学です。

フランスの大学制度

フランスというのは大学入試資格制度というのがあって、資格試験に受かると自分の希望大学へ書類を提出するんです。原則的にフランスは国立大学しかありませんので、ごく一部特殊な私立というのはあることはあるんだけれど、一部の音楽大学みたいなものです。だけど普通の人達がいくのはみんな国立大学です。入学資格を得ると、どこかの大学に行けるんです。だから、例えば東京にあるような東京大学とか一橋大学とかいうような大学と高知大学みたいなのが全く平等になるわけで、入学資格を取れば自分の希望を出す。ただそうすると、やっぱり希望が大きいので全員を収容することができなくなります。そこで出身地がどこかとか見て少し割り振るということが行われるんですけど、原則的にはどこの大学に入れるかは分かりませんという仕組みです。例えば、自分の家がパリにあるならパリ大学に行けそうだとかいうのはあったりしますけど、そういう仕組みになっています。

その入学資格試験を取った上で、もういっぺん個別大学の入試をやり直すというのが、さっき言った高等行政学院とか高等理工学校のやり方です。この試験は、ある意味ではもの凄く難しいんです。例えば外国語の試験という時に第一外国語・第二外国語・ラテン語と三つありました。難しいというのは、今はラテン語があるかどうか分からないけれど10年ぐらい前だと、ラテン語は外国語なのか古語なのか分からないですけども、ただ現実に使ってない言語です。ですから、この語学試験だけでも結構たいへんです。

実際にはそういう試験を受けようと思ってやっていくと、どうしてもどこかの科目で成績の悪い科目が出てしまいます。そうすると家庭教師を付けてカバーするんですけど、フランスの家庭教師というのは、家庭教師の資格を持ってないと駄目なので、資格を持ってないのにやるとモグリになってしまうんです。これは非常に向こうの社会ではまずいです。

実はフランスはいろんな資格制度があります。例えば日本だったら、仮に僕が焼き物を焼こうという気持ちになって、それで焼き物を自分で焼いて、それでどこかで個展か何かやって売るという場合に、別に売れなくてもやってかまわないし、やってみたら意外に売れましたなんていうのがあっても一向にかまわなくて、そしたら自分の肩書陶芸作家なんてしてしまってやってるとかです。実際そうしている人達が日本には結構いますし、それ自体できます。でも、フランスでは許されないんです。つまり、陶芸職人のバカロレアという資格を持ってない限りは、陶芸する会社に勤めることはできても、独立した陶芸家として仕事をすることはできないという制度です。だから、日本に来て焼き物を焼いているフランス人って結構いるんですけど、その人達なんかも日本は天国だって言います。誰がやってもいい、売れるか売れないかという問題はあったとしても、少なくとも資格が無かったら陶芸家になったら駄目よ、なんていう制度は無いってことです。だから、フランスってそういう感じの社会なので、家庭教師やるにも資格が必要で、モグリをやるとこれ摘発されたら結構えらいことになるという、そういう感じです。

ですから結果として、家庭教師の料金はいくらか分かりませんけど結構高いです。ちなみに僕はフランスに行って家庭教師を頼むことはないですけど、実は通訳を頼むことはあります。というのは、僕のフランス語はあくまで旅行で使う程度のフランス語で、何かをちゃんと調べようということになってくると、やっぱり専門の人が付いて専門用語の通訳とか全部できないと困るんです。フランスには通訳組合というのがあるのでそこに電話をして、例えば「今度、山村地域の調査をしたいので、山村地域の農業用語とか、林業用語とか、村の用語とか、そういうものを通訳できる人で、しかもフランス語と日本語でできる人っていますか」って問い合わせるんです。あるとき本当にその問い合わせをやったんですけど、そしたら「二人いるけど、一人は今、通訳の仕事に出かけてい

るので、ちょっと無理なので急きょだったらもう一人の方には今からあたってみることはできるけど」ということで、「じゃあお願いします」と頼みました。大体その場合の通訳料金というのは、日当で言うと９万ぐらいです。しかも地方に行きましたので、往復の交通費、行った場所の宿泊料金、それから僕が拘束している間の食事代は全てこっち持ちという感じになりますから、まあ１日大体10万ちょっとくらいかかるので、３日も雇っていると30万超えますよという、そういう感じです。たいへん高いです。ただし、腕は良いです。

ですから結局、ちゃんとした資格持っている人の家庭教師を雇った場合に結構お金がかかるんです。だから親にそれができる資力があるかどうかっていうのは、実はかなり大きな問題になってきます。しかも１科目じゃないですから、大体そういう人達って４科目とか５科目の家庭教師を付けたりします。それから、ある時に高等行政学院の国語の入試問題が手に入ったからこう見ていたら、フランスにフローベールっていう作家がいるんですけど、夏目漱石の時代ですけども、“フローベールの作品は何とか主義的だと評価をする人がいますが、そのことに対するあなたの見解を書きなさい”という、実は国語の問題これ１問なんです。こうなると、実は日本のような暗記式のものよりも思考を問うてるということで、いいように感じるんですけど、実はそのフローベールの作品を家族がみんな読んでるような家庭でないとこの問題は解けないですね。つまり、自分ももちろん読んでないといけません。そのフローベールについて、例えばご飯の時なんかでも家で会話があって、これはなんとか主義だって言う人いるけど、例えば「あれは間違いだよね」ってお父さんが言うとか、するとお母さんが「いやそんなことはない、その意見というのは結構正しいんじゃないか」と言うとか、そういう会話が家で成立する人ですね。それ以外は弾かれてしまう。しかも、その国語だけを受けてるのならいいですけど、あらゆる科目の試験を受けてるわけで、そうすると家の雰囲気がそういうものを持ってないと実は弾かれてしまうんです。だから試験って難しいもんだなって思ったのは、日本式の丸暗記して○×問題だったり、四択から選ぶみたいな、あの試験が良いとは思わないんですけど、だけど、じゃあフランスの高等行政学院みたいな試験が良いかということになると、実は階級社会の連中の自分達の権利を守るための試験になってしまっているというと、どっちもこっちだなあという、そういう感じです。つまり、そういうふうなことが万事あるから結局ヨーロッパって大体そういう雰囲気なんです。

寄り添える関係の社会が必要

そうするとさっき言った“知の支配と階級的な支配”というのが合体するわけで、それが今のフランスみたいにイエローベスト運動みたいな、そこから弾かれた人たちの反乱というか、そういう感じのものが起きてます。しかもその担い手達がいわば旧社会主義勢力みたいな人達もいるけれど、そこにル・ペン率いる国民戦線系のいわゆる国家主義勢力といいますか、その人達もいて、実は国民戦線が力を付けてきたのも反エリートで力を付けてきたと言ってもいいわけで、つまりこのフランスを支配してきたエリート達が自分達を圧迫してきたっていう、それに対する反感をあおる形で勢力を伸ばしたわけで、だからイエローベスト運動でも両派が参加していて、時々両派で小競り合いやってるみたいですけど、そういう時代を作ってしまう。だから今世界はそんな感じで一つの時代を終わらせようとしているんだけれども、ただし先ほど言ったように、じゃあその啓蒙主義とか知の力がある意味では社会の上位に立つみたいな、そういう社会の在り方が終わろうとしているその時に、いわば感情主義的なものが台頭するということになってくると、一つの時代の終わりが実は出口を失っているということにもなってしまうわけです。だからこういう動きを経ながらこれから何ができていくのかというのは、本当に分かりませんという感じなんです。ただ言えることは、やっぱり普通の人達が主人公になれるような社会を作らない限りやっぱりこの問題は解決しませんということです。

じゃあ、普通の人達が主人公になる社会が何な

のかと言ったならば、やはり冒頭の方でお話したように寄り添える関係の社会でなければいけないんです。僕がいる上野村ですと、さっき言ったように1,200人しかいない。そうすると、そこには寄り添えるような関係が成立していて、しかもその寄り添う関係の中に自然も入っていて、自然とも人間は寄り添いながら生きています。そういう関係の中で誰もがある意味では主人公という、そういう社会を作っています。うちの村は毎年１月５日に村の新年会というのがあって、そこに来るのは大体200人ぐらいで、１時間ぐらいの新年会なんですけど、初めに村長の挨拶があって、そこで毎年功労者の表彰というのが行われて10人から20人ぐらいが毎年表彰されます。うちの村の一番の功労者は長く村で暮らした人という基準なので、元村長だから優先的に表彰されるとかありません。やっぱり村を守ってきた人というのは、やっぱり村に住み続けた人が一番守っているわけで、そういう人達を表彰する、そういう形でうちの村の新年会は行われています。そこにあるのも、やっぱり寄り添う関係みたいなものが社会の軸になっている時に、それぞれ立場とか動き方は違っていても結局誰もが社会の主人公であるという、そういう社会。それがやっぱりそこには感じられるということです。

だから先ほど言ったように、寄り添える関係ぐらいのところが社会の全権を持って、それで自分達だけでやるのは無理だっていうものは上に委託していく。そういうふうな制度にやっぱりいつか切り変えないと、結局みんなが主人公になれる社会ができないという気がします。大きいところが全権を持ってしまうと、その大きい世界について発言できるような、いわば知の作法を知っているような人達っていいますか。だからそれは別に政権の中で発言力が無くてもいいわけで、それを批判してもいいわけで、ただどっちにしてもその大きな権力に対して迎合するか反対するかはともかくとして、ともかく発言できるような立場を持っている人達がどうしてもエリートを形成するという形を作ってしまっていて日本の場合には、それが階級的に固定化されるってことはないので、いろんな人達がそこには投票するんだけども、やっぱりそうであることには変わりません。

ですから今日ここに参加されている方で労働組合に関わる人もいると思いますが、労働組合に対してある時ぐらいから若い人なんかが感じていたというのは、やっぱりその問題だったんです。つまり組合の中心になっている人達って、やっぱり知の作法を知ってる人達っていいますか、思想的なことも語れるし、理論的なことも語れるし、それから政府と対立するにしても対立していく知も有り提出の仕方も知っているような人達です。

ところが結局それをわきまえない人達からすると、組合に加わっても疎外感ばっかり出てくる。だから従うしかないっていうそういう気持ちになって、それがなんか、やっている人から見れば、「だったら君も中心になってやれるようにしたらいいじゃないか」という話になるかもしれないけれど、やっぱりそれが上手くいかない人達は組合に行っても疎外感を感じるというそういう人達がやっぱりいたということは認めざるを得ないんです。だから大きいものというのは結局いろんな形でそういう知の権力を作ったり、そこから疎外される人を作ったり、どうしても生んでしまう。むしろそうではなくて、寄り添えるぐらいの関係が軸になっていけるような社会の在り方、それを作っていかないといけないということなんです。だから以前の労働組合に力があった時というのはやっぱり職場、職場の分会の力があって、そこではやっぱり寄り添える関係が築けたんです。そこで

そういう関係を軸にしてもうちょっと大きい連合組合みたいなができていくという形だったんです。それが分会の力が弱くなっていって、それで上の方の中央執行委員会的なところが力を持つみたいな感じになってしまうと実は力も弱くなってしまうということだったというふうに思ってもいいんだろうという気がしてます。

関係がつくりだすローカルな世界

だから、僕はそういう意味で関係が作りだす世界っていうのをローカルな世界というふうに呼んでいます。もともとはローカルな世界というのは、地域的な意味で、ある地域というのをローカルな世界というふうに呼んできたんですけど、じゃあ地域って何と考えてみると、地域というのはその地域独特の関係が集積されているのが地域なんです。だから僕のいる上野村だったならば上野村の自然と人間の関係があったり、それから上野村的な人間と人間の関係があったり、そして村といえども外と外との関係もありますので、うちの村というのは実は自給自足が昔からできない村で田んぼなんかを持っていないんです。だから江戸期は養蚕で食べていたという、そういう村です。ですから、そうすると地方って江戸との関係とか長崎との関係とか、そういうのを持ちながら生きてるというそういう地域でもあったし、さらにはそこには自分達の地域が作っていた文化との関係とか、いわゆる宗教信仰とは違うような地域の土着的な信仰、うちの村で言うと山の神信仰とか、水の神信仰とか、そういうのが軸になっていくんです。まあ何処にでもあるでしょうけど。そういうふうなものとの関係とか、つまり実は地域社会にはいろんな関係が集積されています。だからいろんな関係が集積されていることによって、単なるエリアではなくてローカル世界を作っていたというふうに考えてよくて、そうであるならばローカルという言葉の意味を地域に限定せずに関係が作りだすローカルというふうに言ってしまってもいいんだろうという気がします。だから逆に言うと僕なんかでも、上野村にいる時はローカル世界があるという感じがするんだけれど、東京にいる時にはローカル世界があるという感じがしないんです。つまり東京にいる時には関係がないという感じで、もちろん東京でも僕と関係を持っている人達はいるんだけど、それは地域の中にはいなくて、ある人は千葉県に住んでいたり、ある人は埼玉県に住んでいたり、そういう形で集まれば関係を結んでいるという感じになってくるので、そういうローカルな在り方も東京なんかだったら有りだなという気がしますけど、地域は無いっていう感じです。

ですから、関係によって結ばれていくローカル世界というものをしっかり作っていかないと、その関係の中ではみんなが役割を持つということが可能だけれども、一つのシステムができあがると、そのシステムを支配する人とシステムに従属する人という、その二つの分裂を生んでしまうという、その分裂が深刻な形で今出てきているのが、現実の世界というふうに思ってもいいんだろうという気がします。そういうものを実は持ちながら近代的な世界というのはできてきました。だから近代的な世界というのは絶えず内部からファシズムとか国家主義が台頭するという、そういうことを繰り返し、繰り返し、繰り返したというふうに言ってもいいです。

実際、1930年代というのは、ナチズムの成立って形でよく言われるわけですけど、あの時のヨーロッパを見ていくとイタリアもムッソリーニのファシスト党が政権を取りましたけど、スペインもフランコ率いるファシズム勢力が政権を取って、ただ戦争には加わらなかったっていう感じです。つまり内戦の後だったからっていうそんな感じでしょうけど。ただ実際にはフランスでもファシズム勢力が政権を取る寸前までいきました。その寸前までいったところで人民戦線というのができて、人民戦線側が勝利して人民戦線政府ができるという、そういうことになりました。だけど、寸前のところまでいったということは間違いなくて、しかもあの時もうパリはファシズムの牙城だったんです。だから人民戦線ができた時のスローガンの一つが「パリだけがフランスではない」というのがスローガンだったんです。まさに農村が都市を

包囲するみたいな感じで人民戦線ができていって、それがその後の時代でもレジスタンス運動にもそれが受け継がれているから、レジスタンスというのはパリの人なんかほとんどやってないわけで、みんな農村の人達が闘って最後はパリの地下水道まで入ってきて、それでゲリラ戦をやるという格好になったわけで、だからそれがあるから、今でもフランスというのは地方に行けば行くほど反政府的であるという、そういう感じが残っている国でもあります。

つまり、ヨーロッパというのは、あの時代何処の国もファシズム政権になっても不思議ではないような状況だったんです。今また、そういう雰囲気がだんだん大きくなってきました。そういう中で日本の安倍からトランプから、ちょっとファシズムの親戚のような政権ができていった。つまり、こういう時代を終わらせようとすると、やっぱりその基盤というのは関係が支配するような世界を創りあげないと、結局その主人公になれない人達を生んで、その主人公になれない人達の苛立ちを上手に吸収していく勢力が発生してくると、そこが力を付けるという、それがかつてのファシズムでもあったということです。

関係こそが本質

もう一つ言えることは、さっき例えば地域には土着的な信仰もあったって言ったんですけど、実は宗教信仰という言葉は明治の翻訳語なんです。外来語を翻訳するために宗教信仰という新しい単語を作りました。だから「江戸期迄の日本には宗教や信仰は存在しませんでした」って僕は言い切ってかまわないと思っています。しかし、そうするとあれって気がしてくるのは、日本には神様は山のようにいるし、それから古代から仏教は入っているし、仏教が日本中に広がっていったのは鎌倉期ぐらいですから、少なくても千年ぐらい前には仏教はそこら中に展開をしたと。そうすると、宗教でも信仰でもないということになると「あれはいったい何なんですか」ということになるんですけど。ただ、日本の仏教が教団仏教化していくっていうのは明治以降なんです。その前ももちろん教団はあったんです。例えば、最澄が天台宗を作ったとか、あるいは法然が浄土宗を作ったとかです。それはその通りなんです。ところがそこは自分達の仏教を勉強しにいく場所みたいな感じで展開をしていてその勉強をした人達が村々とか町々とか地域に散っていった時には村や町のお寺に入った。つまり教団が作ったお寺ではなくて地域の人達が作りあげたお寺、そこに入っていく。だから、その何とか宗であるということよりも、そこの地元のお寺であるということの方が優先してるんです。だから実は勉強の仕方も今とはかなり違っていて、例えば天台宗の人が比叡山で勉強していて、ちょっとこういう方面も深めたいと思うと浄土宗の知恩院の方に移って、知恩院の方で１、２年勉強してると、また天台宗に戻ってくるとかです。あるいは、その逆に知恩院のお坊さんが比叡山に登って勉強しているとか、そういう相互乗り入れっていうのは、まだ戦前は少し残っていたと言っていて江戸期までだったら普通の話でした。つまりそういう場所だったっていう、だから地域のお寺も地域のお寺であって、何とか宗のお寺ではないんです。

江戸期になると幕府の命令で日本のお寺は全部何とか宗に入らなければいけないっていう命令が出たんです。そのことによって一応寺の玄関に何とか宗って看板が出るようになったということです。ただ、それはちょっと無理があって、つまり地域のお寺がもともとだから、看板としては何とか宗を掲げているんだけど実態はそうではなくて、地域のお寺のままというのが普通なんです。そうすると、そこであった宗教信仰というのは、実は自分達の生きる世界にしっかり一体化していて、分かりやすく今で言うと、例えば明日受験があるというような時にお子さんのかなり多くの人が、「上手くいきますように」とお祈りをすると思うんです。それみたいなものだと思ってもらえればいいです。だから別に上手く行くようにとお祈りしたからといって、何とか教に入ったわけでもないっていう、だから自分達の生きる世界の中でお願いすることがあったり、お祈りすることがあったり、上手くいったらそのあと今度感謝をし

てお礼を言うとか、そんなことをやりながら生きていたということであって、特に宗教信仰とは違います。むしろ明治になって、かたや神様の世界は国家神道ができていて、それに対抗するように仏教の世界も教団化していくという、そういう歴史をたどって今の宗教界があるというふうに思えばいいかなという感じです。

ただ言えることは、僕も実は自分の専門は西洋哲学なんですけど、西洋哲学というのは今から200年ぐらい前、つまり19世紀に入ったぐらいからですけど、一部の哲学者の中から西洋的なものの考え方に誤りがあったっていう、そういうふうに考える人達っていうのがボツボツ登場してきています。その西洋の考え方に問題があったと思った人達が、東洋の思想から学ぼうという形になっていって、その時の軸になったのが仏教研究だったんです。だからドイツで仏教研究が始まったのも、だいたい19世紀初期ですし、19世紀の半ばぐらいになりますと結構いろんな人達が仏教について語るようになってきました。

例えば、ショーペンハウエル、ちょうどマルクスの時代くらいの人ですけども、そのショーペンハウエルなんかでも人間の生の本質、生きることの本質は何かと言うと、それは無であるという言い方をしていて、それで死の本質は何かと言うと、これもまた無であるという、だから生と死には分ける境界線は存在しないというようなことを、大体1850年頃にショーペンハウエルが書いています。だから今から150年ぐらい前の話なんですけど、一部の人達はもうそういうことを普通に語り合っていた時代です。

20世紀になってくると、今度ますます西洋的な思考様式の限界というのが意識されるようになって、皆さん東洋系のものを勉強するようになってきました。ということで、実は今、哲学やっている人間って結構東洋系のことを勉強していたり、さらには僕の場合はやっぱり日本ですから日本の昔の民衆思想とか、そういうのを勉強しようという方向にもきています。そういう人達からすると、例えば仏教というのは率直に言うとあれかなり難解な思想なんです。一言で言ってくれなんて言われても困りますっていうようなものであって、例えば人間の本質は無であるとか、あるいは空であるというふうに言った場合でも空とは何ですかっていう話で、きてしまうわけです。これなかなか説明するのは難しいです。

ところがさっき言ったように鎌倉時代に入ると、この仏教思想が日本の民衆の中にパアッと入るんです。結局どうしてかと言うと、日本に入ってきた大乗仏教思想というのは、やっぱり関係こそが本質だっていう考え方を持っていたということなんです。だから、さっき言った空っていうのも人間の本質は空であると。なぜかと言うと人間の本質は関係によって出来上がってるからだってことなんです。こう見えている私とかあなたというのは、関係が作りだした現象に過ぎないというふうに捉えていて、本当の実態は無いというふうに考えてきました。つまり私達生きていく上でいろんな関係を作っています。家族との関係も作っているし、職場の関係もあるし、地域の関係を持っている人もいるでしょうし、自然との関係を持っている人もいるでしょうし、あるいは文化とかそういうものとの関係を持っている人もいるでしょうし、つまり実は一人の人間がいろんな関係を作っています。そのいろんな関係こそが、その人を作りだしている本質なので、それは関係だから見ることができない、だから空であるという、その関係によって作られた現象だけが私達には見えるという、そういう捉え方なんです。こういうものが、かつての日本の人達には意外にすっきり分かったんです。つまり関係を大事にしながら地域を作っ

たり、自分達の暮らしを作ったりしている人達からすると、関係こそが本質だって言われたならば、簡単にそれにうなずくことができた。その関係がこの現象世界を作っているんだっていう言い方に対しても、同意することができたということです。そういうふうなものを、だから仏教の授業なんかもやりながら、かつての日本の社会というのは関係本質論みたいなものを展開したと。だから、それは結果としては出てきた現象も共同体社会を作ったということです。共同体社会というのは、やはり寄り添えるぐらいの社会。それを軸にしてその上に藩があったり国があったりする、そういう時代を作りました。そうすると今は私達そういうものからも学び直さなければいけない。だから、もちろん関係がこの世界を作るんだと言ってもその関係の在り方は今、江戸時代じゃありませんから現代的な関係の作り方をしないといけないし、それがその関係によって最小の単位としての共同体みたいなものができるんだと言っても、その共同体の在り方もまた今の時代に合ったものにしていかないといけないしということではあるけれども、やっぱりこの辺りからも全部学んでいくといいますか。

それは結局、冒頭でお話したように1789年にフランス革命があってそのフランス革命は強大な権力を作ってしまったと。それからまた人間達が関係で生きる時代からよく言えば個人が自立する時代に移ってきました。結局それは人間達がバラバラになって孤立していく時代を作ったしまったという、今そういう反省の上に立ってこれからの社会を見ていくと。またそのフランス革命以降のそういう個人がバラバラになりその中で不安が発生したり、孤独感が発生したり、疎外感が発生したりしていく、その中で強大な権力の取り合いで先導政治が行われていくという、こういう中で今の時代の実にいろんな悲劇が発生しているという、そのことをちょっと見つめながら、この関係が作る世界というのを少しでも作りあげていく。そんなことを求められている時代だろうなというふうに思っています。ということで一応話を終わりにして、あとご意見伺います。

（会場から拍手）

……

（司会）

はい、ありがとうございました。せっかくの機会でもありますから、質問・意見も含めてお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

（会場）

その関係についての質問ですけど、関係性を維持していくとか、発展させていくにはエネルギーがいるんじゃないかと思うんですよ。原動力としてですね。それはいったいどのようなものになっていくんですか。例えば寄り添える関係、寄り添える状態をずうっと続けていくためのエネルギーっていうんですかね、それを関係だっていうふうに何か文化だとか信仰だとかということをちらっとお伺いしたんですけど、その辺をもうちょっと詳しく教えていただけたらと思います。

（内山氏）

そうですね、関係の中にはよりしっかりしたような関係になっていくような関係もあっていいけど、だんだん必要がなくなってきて弱体化したり壊れてしまうような関係もあってかまわないんで、ただいろんな関係が成立することが重要なわけです。しかも関係を作ろうと思わなくてもできている関係が実は一番強固な関係なわけです。分かりやすく言うと家族の関係なんかそうです。例えば赤ちゃんが生まれたら、この子と関係を作ろうな

んて親は思わないわけで、もう当たり前のように育てています。そうしたならば、いつの間にか強固な関係になっているということだし、だけどその親子の関係だって子供が大きくなって独立してまた結婚したりしてくると、関係が無くなることはないけど、やっぱり前よりはちょっと薄くなるといいますか、起きてかまわないわけです。だから、何が何でも関係維持とかいう話よりも、そういう関係っていうのは縦横に強化されたり緩くなったり、時には壊れてしまうものがあってもいろんな関係が発生することの方が重要です。

（会場）

二つ質問があります。一つ目は国・県・市町村という縦割り行政ということでよくやると。それでも住民が住んでいる基礎自治体の役割が大事ですよということで、みんな認識しておるんですけれども、先生が言われた市町村から県へ委託する、それで県から国へ委託すると、そういうまさに発想の転換じゃないですけれども、それを制度の仕組みまで生かそうとするのか、住民のそこに住んでいる人達がそういう発想、ものの考え方で、今そうじゃない社会を良くしていこうという観点で立つべきかなあということも考えたということと、それと二つ目は下世話な話だけれども、イギリスのユーロ離脱ということはイギリス国民がここまで混乱するとは思っていなかったのじゃないかと。まさに先導的な状況であの国民投票でなってしまったというような形で、いったいイギリスも階級社会が結構あると思いますけど、そういうとこれからの行く末は、分からないと言えばそうですけれども、先生が考えてあるところがあればお聞かせ願いたいと思います。

（内山氏）

僕は基礎的な自治体が今の規模でいいのかどうかの検討はしないといけませんけど、全権を持つという仕組みに制度的にも変えていかないと、根本的な問題が解決しないというふうに思っています。ただ今すぐに「変えましょう」と言ってみんなが「分かりました」と変えるという状況ではないわけですから、だからそこでそういう気持ちを持ちながら一歩、一歩、自分達の足元の世界みたいなのを固めていくという、だから国にぶら下がって地方を作るのではなくて、こっちが全権を持つんだというような気持ちを持ちながら、いろんな改革をやっていくといいますか。それを取りあえずは積み上げながら、でも最後はやっぱり制度そのものを変えないと、やっぱりフランス革命以降の問題というのは、解決がつかないっていうふうに思っているということです。それから、あとあのイギリスの社会というのは、これも階級社会ではあるんですけど、もう一つ言えることはイギリスって、何処までがイギリスですかっていうのはよく分からない社会なんです。スコットランドの独立というのがありましたけど、今度アイルランド側には北アイルランドという今イギリスになってる所があります。スコットランドの独立なんかがもし再度決まるなんてことがもし起きた場合、北アイルランドは独立するでしょうし、そうすると多分ウェルズも独立する、そうすると残っているのはイングランドだけになるという、そういう社会なんです。だからイギリスとしてはそれを止めたいわけです。今のイギリスの大きさといいますか、それはどうせ維持したいわけです。だから、それを維持しながらやっていくにはどうしたらいいかという、そういうとこでやっぱりEUとの関係なんかでも、ある種のイギリスナショナリズムみたいなものをあおらなければいけないし、だけど下手にEUから出た時に逆にスコットランドの独立の方が力を付けるという可能性もあるんですよ。だからイギリスというのは実は凄く厄介な社

会なんです。

例えば、ロンドンというふうに言った場合に、僕らはロンドン市とこう言うんですけど、ロンドンの中にまたいくつもの社会があるんです。それは昔のバイキング達が集まった社会とか、それぞれが独自の文化を持って実に複雑怪奇な厄介な社会を作るといいますか。イギリスってそういうところがあって、ヨーロッパっていうのはもともとそういうところがあって、イギリスは特に厄介っていう感じなんだけど。イギリス王室と言ったって、あれ失脚したフランスの貴族が行って作った王室なんでフランス王室でもあるわけです。だけど、そんなことにこだわっていたらやっていけない社会でもあります。だからどこの国もそういうふうな歴史を持っていて、だから一面ではロシアが「北方四島を返せ」って言ったら、「あんなもん決着済みじゃないか」というのも、分からないでもないです。つまり、国境線なんか戦争に勝った方が自由に変えていくというのがヨーロッパの歴史なんです。だから、ドイツだって第二次大戦に負ける前は今のポーランドの３分の１ぐらいドイツなわけです。結局それをポーランドに渡したというのが、ソ連が西の方まで取ろうとしたんで、ポーランド領を取ったので、それでポーランドが余りにも小さくなって、しかもポーランドは一応ソ連圏に入りましたから、そのために今度ドイツ側に押した。それで今のポーランドっていうことなんです。だから、第二次大戦の前はドイツなんです。国境線なんかそんなものです。ということは実に複雑怪奇な問題を起こします。

日本の場合は、北海道は最近だしとか、沖縄はもっと最近だしという、その辺の問題もあるんだけど、一応、九州側の薩摩藩、奄美になると江戸時代の併合になりますけど、一応その鹿児島の所から青森の所までは、まあ取りあえずかなり長期に渡って日本でしたよねっていう言い方はできます。だから、そういう社会に生きている人間からすると国境がぶん取り合戦だったり、またそれでそういう中で住み着いた人達が何百年経っても自分達の独立世界を維持するとか、そういうことっていうのはもの凄く分かりにくいです。だからある種そういう複雑さを抱えているのがヨーロッパ

でもあって、そういう中で政治的な思惑っていうのは出ますから。EU から出るか出ないかだけの問題じゃないです。どうやって大英帝国を維持するかとか、そういうことなんです。僕の友達がスコットランドの方に行って、町の大衆食堂みたいな所へご飯食べに行って、そしたらおばさんが「どこから来たの」って聞くので「日本」と言ったら、「この辺好きなの」って聞かれたから「大好きだ、イングランドは大好きだ」と言ったら、おばさんが「イングランドが好きな人は出ていってくれ」と追い出されてしまったといいます。それはスコットランドでイングランドが大好きだっていうのは絶対言っては駄目なんで、つまりそういう社会です。その点、日本では、高知に来て「東京大好き」と言って食べ物が全部引っ込むという社会ではないです。だからそういうことを抱えながらヨーロッパと。

（司会）

はい、あとお一人、後ろの方どうぞ。

（会場）

お話ありがとうございました。ちょっと遅れて参加してしまったので、最初の方でお話なさっていたら大変申し訳ないんですが、関係についてもう少し伺えたらなあと思います。地域社会にいろんな関係があるというような状態が大事だとおっしゃっていること、非常に分かるように思う一方で、分からない部分もあるように感じていて、何というか積極的にある種のコミュニティーであっ

たりだとか、例えば職場であったりだとか積極的に関係を持つということを自らその拒絶するというかですね、そういった方々もいらっしゃるように、具体的な場面を想像すると思うんですね。そういう時にそういった方々にも届くような形でのその関係、いろいろな関係を作っていく在り方というんでしょうか、その届く声というんでしょうか、ちょっと自分もあんまり上手くなんというか思い描けていないところがあるんですけれども、そういったところにも届くようなその関係の作り方、自らが関係を築くことをあえて拒絶してしまう、自分が我慢していればそのシステムの中に入っていって、さざなみが立つことも無いからっていうような、そういった方々ともその関係を作っていくためには、どういうことが大事であったりだとか、どんな発想ができるのかということについて、教えていただければと思います。よろしくお願いします。

（内山氏）

あの共同体とかコミュニティーというのは、それを訳して共同体なので僕はコミュニティー＝共同体と。共同体という言葉もこれ江戸時代までは無いです。明治の翻訳語です。例えば共同体って言葉を使うと、村とかそういう一つの組織があって、その組織にみんなが繋がっている状態というのをイメージする人が多かったんです。これ実はあのヨーロッパの共同体の形をそのまんまコピーしてしまったんです。日本の共同体ってそんな形にはなってないので、日本の共同体というのは、

さまざまな小さな共同体があって、それが集積している時に本当の共同体社会ができます。だから、昔で言うとその中に自然とのつながりというのもあるし、それから子供同士のつながりみたいのもあるし、それから職業別的なつながりもあるし、それから昔だと檀家さんのつながりとか、氏子さんのつながりとか、地域文化を守っていくつながりとか、実にいろんなものがあるんです。地域のつながりでも、自分が住んでいる集落のつながりもあるし、それからもうちょっと広いつながりもあるし、だから地域も一つではないんです。そういういろんなつながりがあって、それが集積していると本当にここは共同体社会だなっていう感じになる。だから大きな町内会を作るわけじゃないんです。強大な力を持った町内会なんか作ったら良い面もあるかもしれないけど、うっとうしい面もいっぱい出てくるので、それが共同体ではないっていいますか。

ヨーロッパの場合には村でもこう城壁を作って一つの小さい世界を作ったんです。だから、それを共同体とみたっていいますか。だけど日本の場合にはもっと拡散した共同体なんです。そこにはいろんなものがあります。それをコミュニティー論で出した人としては、向こうの人ではトクヴェルとかマッキーバーとかいます。彼らが言っていることもやっぱり、小さな結びつきを大量に持つことが社会を健全化しているということだと。つまり、大権力をそこでも発生させないってことです。そういう点でいくと、その関係性というのは意識されてる関係性だけじゃなくて、意識されない関係性っていうのもあるわけで、でもさっき言ったように親子の関係なんてほとんど意識されない関係性です。ただ子供が独立していったりすると、今迄こういう関係性があったなと逆に意識するようになるっていいますか。もちろん、そういうものが多かったりするし、それから子供達が学校の行き帰りなんかで作っている関係性だって関係性を作ろうと意識して作ってない。あるいは自然との関係性なんかでも、意識されずに作っている自然との関係性っていっぱいある。

だから実は関係性拒絶というのは意識された関係性を拒絶しているだけなんで、全ての関係性を

拒否しているわけじゃない。もし全ての関係性を拒否してしまったら、私達は何処にも生きる場がないということになるわけです。だから、そういうふうな意識しない関係性から意識された関係性まで、そういうものがどう積み上がっていった時に私達は住みやすい世界になるのかと。多分それを拒絶する人達というのは、関係性というのは一つの意識された関係しかなくって、それは結局利益よりも煩わしさの方が大きいという、そういう気持ちを持っていて「ほっといて下さい」って話になってくるんだと思うんです。だからそういうことじゃなく、我々はいろんな関係性と共に生きてるよねっていうのを、もう一度こう見直していくっていいますか。その中には本当にさっきも言ったように、だんだん強まっていくものもあってもいいし、逆に弱まっていくものもあっていいし、中には消えてしまうものがあったっていいしということなんだと思うんです。

（司会）

はい、よろしいでしょうか。そうしましたらちょうど８時になりましたので、本日の内山先生のセミナー以上で終了したいと思います。最後に皆さん、拍手でお礼に代えたいと思います。どうかよろしくお願いします。先生ありがとうございました。

（会場から拍手）

（司会）

それでは以上で本日のセミナー終了いたします。ご清聴ありがとうございました。